

2023年4月23日 主日礼拝

説教題「再召命の朝」ヨハネ福音書 21 章 1～14 節

主任牧師 加藤 誠

「イエスは、『さあ、来て、朝の食事をしなさい』と言われた」(ヨハネ21章12節)

イエス・キリストの生涯を伝える福音書はマタイ、マルコ、ルカ、ヨハネと四つあり、それぞれユニークな仕方でもキリストの福音を伝えてくれています。その中でもヨハネのユニークさは際立っています。マタイ、マルコ、ルカの三つは共通した資料をもとにしている関係で「共観福音書」と呼ばれていて、似かよった内容が多いのに対して、ヨハネ福音書はまったく異なった形で主イエスを語り伝えていきます。共観福音書と共通しているのは「五千人の供食」と「神殿清め」くらいで、あとはすべてヨハネ独自のエピソードです。登場する弟子も、ヨハネ福音書ではフィリポ、アンデレ、トマスといった、共観福音書では名まえだけ登場する弟子にスポットライトが当てられていて、彼らと主イエスとの対話の様子が詳しく描かれています。一方、ヨハネ福音書の論理展開はよく分からないところが多く、なんだか「宇宙人」のように感じる場所もあるのですが、深く心に残る主イエスの言葉がいくつも伝えられていて、これまで大勢の人々に愛されてきました。このヨハネ福音書のおかげでどれだけ主イエスの姿とその福音が多角的に、立体的に浮かび上がるものとなってきたか。今回、受難節からイースターにかけてヨハネ福音書を読む中で、「ヨハネさん、この福音書を書き遺してくれて、ほんとうにありがとう！」という思いでいっぱいになりました。

キリストの教会も同じです。多様な人びとが、それぞれの人生の中で出会ったイエス・キリストを自分の言葉で多様に証しし、紹介していく交わりでありたいのです。牧師は礼拝説教という形でかなりの時間を託されて語らせていただくわけですが、あくまでも「加藤の福音理解」であって、目的は一人ひとりが自分の言葉でイエス・キリストを語り、そしてお互いの言葉、証しを分かち合い、さらに自分で考えていくところにあります。そういう意味でこの5月からようやく教会学校の分級（成人科）が再開できることは大きな喜びです。教会が「一つの言葉／一つの信仰」にまとめられてしまうことなく、自由で多様な交わりの中に主が働かれ、キリストの福音が分かち合われていくことを喜んでいきたいのです。

さて、今朝はヨハネ 21 章を開きました。実はヨハネ福音書は 20 章の結びの言葉をもって一度閉じられているのですが、どうしても語っておきたいこととして 21 章が付け加えられたようです。そこにはどういう意味があるのでしょうか。

21 章の舞台はティベリアス湖畔、ガリラヤ湖のほとりです。ペトロたちはかつてガリラヤ湖で働く漁師でしたが、主イエスと出会い、主イエスの招きを受けて従う者とされたのでした。最終的に主イエスは弟子たちと一緒に遠く都エルサレムに上られ、そこで十字架につけられたわけですが、しかし復活された主イエスから、

ペトロたち弟子は聖霊の息吹を吹きかけられて、彼らは改めて、神の愛と赦しを携えて人々の間に派遣されたのした（20章）。なのに、なぜその弟子たちが湖で漁をしているのでしょうか。「普段は福音伝道をしていたけれど、この時はたまたま漁に出かけただけなのではないか」という説から、「いや、福音伝道に疲れてやめなくなったのではないか」という説まで、いろいろな推測がされているわけですが、わたしは「ペトロは確かに復活の主と出会い、その心に聖霊を吹き込まれて、暗い部屋から外に出る力を与えられたのだけれども、どうしても次の一步が踏み出せずにいたのではないか」と想像しています。復活の主から「平和があるように」とやさしい言葉をもらい、深いダメージを受けて砕かれていたペトロの心は癒されたとしても、「あの夜」イエスを知らないと言って裏切ってしまった自分をどうしても許せないという思い、そしてそんな自分に果たしてイエスを語る資格だあるだろうかという思いがまだ鉛のように重くペトロの心の中に残っていて、主イエスから「あなたがたをこの世に向けて派遣する」と言われても、どうしてもその一步を踏み出すことができずにウロウロとしていたのではないかと。

しかし、この朝、ペトロはかつてティベリアス湖のほとりで聞いた主イエスの召命の言葉をもう一度聞くこととなります。前の晩から漁に出たペトロたちでしたが、残念ながら何もとれず深く徒労を覚えていたところに、岸から声が聞こえてきたのです。ルカ福音書5章には、ペトロたち漁師が主イエスから召命を受けたのが、やはり夜通し働いても何もとれなかった朝のことでした。「網を下ろしてみなさい」という主イエスの呼びかけに「お言葉ですから」と従ったペトロたちの網におびただしい魚がとれて、ペトロは「罪深いわたしから離れてください」と告白せざるを得なかった。それと同じ出来事がまた起こったのです。信仰とは、日々主イエスの言葉に従うことを学んでいくことです。ペトロが自分で自分を「こんな情けない自分には語る資格がない」と決めつけてしまうのではなく、逆に自分の力で神の国を証ししようとするのでもなく、主イエスがこんな欠けと未熟さをかかえた自分を招いて大切な働きに「用いる！」と言われる。その主イエスの招きの前に「ハイ」と応えていくこと、それが信仰です。興味深いのは、主イエスの愛しておられた弟子がペトロに「主だ」と告げると、ペトロが湖に飛び込んだ姿です。他の弟子たちは船をこいで岸に戻っていく中で、そんなことお構いなしに、相変わらず「思いついたらすぐ行動に移し、待てないペトロ」がここにいます。ペトロはペトロ。復活の主と出会ったからといって何も変わっていないわけです。けれども、そのペトロたちの体を温め、ねぎらうために、主イエスは炭火を起こし、朝の食事を用意してくださっていました。教会は主イエスの配慮、ねぎらいにいつも力づけられるわけですが、そのねぎらいは、ペトロたちが「船の右側に網を打ちなさい」という主イエスの言葉に従うことを通して体験できたものでした。そういう意味で、今日、私たちが何かに疲れていたり、諦めかけている中で、なお聞こえてくる主イエスの語りかけ、招きに応えていくことができたらと思います。主イエスは招きと共に、必ず配慮とねぎらい、そして養いを用意してくださっているのですから。